博士学位論文審査要旨

２０２０年１２月１６日

論 文 題 目： 精神疾患に対するパブリック・スティグマ低減のためのアクセプタンス＆コミットメント・セラピーによる介入効果の検討
学位申請者： 津田　菜摘
審 査 委 員：
　主　査： 心理学研究科　教授　武藤　　崇
　副　査： 心理学部　　助教　大屋　藍子
　副　査： 早稲田大学人間科学学術院　准教授　　大月　　友

要　　旨：

本研究は、精神疾患に対するパブリック・スティグマの低減に対するアクセプタンス＆コミットメント・セラピー (Acceptance and Commitment Therapy：以下、ACT と表記する)の効果を検証したものである。スティグマとは、ある個人が何らかの属性を有していることを周囲の人に知られた場合、当該個人の信用が失墜させられたり、社会的地位がおとしめられたりする可能性がある属性のことを指す。特に、パブリック・スティグマは、偏見、差別やいじめなどの温床となる危険性があり、その低減の有効な方策の同定が必要とされるものである。

本論文は 6 章から構成され、研究は 5 つ実施された。

本論文の第 1 章では、従来のパブリック・スティグマ低減に対する介入方法（特に、ACT）の効果に関する先行研究が展望された。その結果、未検討な課題として、1）ACT による介入の効果検証は、国内では皆無である（海外の先行研究も数件のみ）、2）パブリック・スティグマと最も関連があるとされている「脱フュージョン（defusion)」と呼ばれる作用機序による効果検討が不十分である、さらに 3）効果検討の際に使用される指標の再検討が必要である、という点が明確にされた。

そこで、本研究の目的は、1）海外で実施されているスティグマに対する ACT 介入を日本語に翻訳したものを実施し、効果検討を行うこと、2）脱フュージョンの作用機序をさらに検討すること、3）上述の 1）と 2）の検討を踏まえ、当該の ACT 介入の改善を行うこととした。研究 1 と研究 2 は、1）の目的を検討するために実施された。その結果、その低減効果はみられなかった。そこで、研究 3 と研究 4 では、その作用機序とされる脱フュージョンの効果が検討された。その結果、従来の手続きでは脱フュージョンを有効に機能させるのには不十分であることが明確になった。この結果を踏まえて、研究 5 では、従来の手続きに変更を加えた「階層フレームを用いた脱フュージョン」という手続きを開発した。そして、当該手続きの効果検証を行った結果、その有効性が部分的に示された。今後は、今回新たに開発された手続きの洗練化によって、精神疾患に対するパブリック・スティグマの低減に対する介入方法の実用化が期待できる。

よって、本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０２０年１２月１６日

論 文 題 目： 精神疾患に対するパブリック・スティグマ低減のためのアクセプタンス＆コミットメント・セラピーによる介入効果の検討
学位申請者： 津田　菜摘
審 査 委 員：
主　査： 心理学研究科　教授　武藤　　崇
副　査： 心理学部　　助教　大屋　藍子
副　査： 早稲田大学人間科学学術院　准教授　　大月　　友

要　　旨：

論文「精神疾患に対するパブリック・スティグマ低減のためのアクセプタンス＆コミットメント・セラピーによる介入効果の検討」を提出した学位申請者に対する総合試験を、上記審査委員3名が2020年12月16日（水曜日）13時30分より、Web上でのオンライン面接によって、約2時間にわたり実施した。

総合試験の冒頭で学位申請者は論文の概要を説明し、その後審査委員から、序論に関する論理的な首尾一貫性、方法に関する詳細、総合考察における展開等に関する専門的質疑がなされた。学位申請者の応答はいずれも適切かつ満足できるレベルにあり、本論文の学術的価値が証明され、学位申請者の研究能力が十分であることを確認した。また、臨床心理学領域における専門知識および学力を十分有することも確認した。

語学試験（英語）については、論文における文献引用で数多くの英語論文が網羅されていることに加え、その研究内容の理解や引用方法も正確かつ適切であることが確認でき、学位申請者の研究に必要な英語運用能力について十分であると判断した。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：精神疾患に対するパブリック・スティグマ低減のためのアクセプタンス&コミットメント・セラピーによる介入効果の検討
氏　　名：津田　菜摘

要　　旨：

スティグマ (stigma) とは，個人がその属性を有していることを周囲の人に知られた場合，信用を失墜させたり，社会的地位を貶めたりするような属性を指す (e.g., Goffman, 1963)。スティグマは4つの要素によって概念化されている (Link & Phelan, 2001)。しかし，自然な思考プロセスに内包されている要素が含まれており，これまでの介入では4つの要素がすべて網羅されているとはいえず，新たな介入の必要性が示唆された。

そこで，新たな介入方法として関係フレーム理論 (Relational Frame Theory: RFT) を基盤とするアクセプタンス&コミットメント・セラピー (Acceptance and Commitment Therapy: ACT) が有用である可能性が指摘された。RFT では，スティグマを言語行動として捉えなおす (Benuto, Duckworth, Masuda, & O'Donohue, 2020) ことで，従来介入困難であるとされてきたラベル付与のようなスティグマの要素にもアプローチを可能とする。スティグマに対する ACT では体験的に，人が自動的に持つ思考のプロセスに気づき，スティグマとどう関わっていきたいかを考えることを特徴とする。しかし，スティグマに対する ACT には2点の問題点が指摘された。2点とは，1) 先行研究の数が限られており，国内での検討は行われていない点，2) スティグマと最も関係が深い刺激機能の変換に着目するプロセスである，脱フュージョンによる効果検討が行われていない点である。さらに，これらの2点を改善していく中で，効果検討において潜在的指標の使用を行うことで多面的なスティグマ評価を行う必要性が示唆された。

以上より，3つの点が本研究の目的として挙げられた。まず，1) 日本語版のスティグマ介入のための ACT を実施し，効果検討を行うこと (目的1)。次に，2) 言語的な反応と実際の現象をあるがままに観察するための介入 (脱フュージョン) に着目し，精神疾患に対するスティグマが持つ特徴や，脱フュージョンのスティグマへ与える影響力を検討すること (目的2)。さらに，3) 目的1で明らかにした日本における介入効果と，目的2で明らかにした精神疾患に対するスティグマの持つ特徴を踏まえたうえで，介入内容の改善を行うこと (目的3) であった。この時，主なアウトカムは顕在的指標と潜在的指標を併用して効果検討を行った。これらの点を検討するため，本論文では5つの研究を実施した。

まず，目的1を検討するために，研究1と研究2において従来最もスティグマと関係が深いとされてきた体験の回避とスティグマの関係性の検討を行った。まず精神疾患に対するスティグマ (顕在的・潜在的) と体験の回避の関係性を検討した (研究1)。その結果，先行研究と異なりスティグマと体験の回避には関係性がみとめられなかった。そこで，従来の介入の効果を再検討するために，Masuda et al. (2007) と同様のデザインによって ACT を実施し，効果測定を行った (研究2)。その結果，顕在的・潜在的指標に関わらず，教育と ACT の介入効果に差は示されなかった。このとき，研究1と一貫して体験の回避とスティグマに関連は認められなかった。以上により，ACT によるスティグマの改善効果が不十分であったことが指摘された。

次に，目的2の脱フュージョンがスティグマへ与える影響力を検討するために，研究3と4を行った。研究3では，脱フュージョンによる介入効果を検討した。その結果，ACT パッケージで使用された脱フュージョンにはスティグマ (顕在的・潜在的) 減少の効果がみとめられなかった。その理由として，“精神疾患”に対して脱フュージョンを行っていないことが指摘された。しかし，

介入前の時点で脱フュージョンと潜在的指標には弱い相関がみられ，スティグマ介入において脱フュージョンに着目する必要性が示唆された。そこで，脱フュージョンを行う際にターゲットとする語の選定のために，“精神疾患”とそれに内包される疾患名，そして否定的なイメージの関係性について検討した (研究4)。その結果，スティグマの属性を有する人物との関係性に関わらず，“精神疾患”と内包される疾患名の階層性を介入に取り込む必要性が示唆された。つまり，ここまでの研究において，1) 脱フュージョンのみによる介入効果は不足しているが，2) 認知的フュージョンがスティグマに関わっている可能性があり，さらに，3) 認知的フュージョンを行う際には階層性にアプローチする必要性があることが示唆された。

そこで，目的3の介入内容の改善を行うために研究5を行った。研究5では，階層フレームを用いた脱フュージョンを行うこととした。そのために，まず“精神疾患”のような複合語を用いたとしても脱フュージョンの効果が十分に示されるかを検討した (研究 5-1)。その結果，複合語であっても，単語と同程度に介入効果が得られることが示唆された。そこで，“精神疾患”を対象に階層フレームを用いて脱フュージョンの効果検討を行った (研究 5-2)。この時測定指標に精神疾患を有する人物との接触場面を想定した行動指標 (座席配置) と，“精神疾患”という語が持つ不快度を加えた。その結果，不快度と座席配置という限定的な部分において，介入効果が示唆された。

以上の研究結果により，本研究の意義が2つの観点から示された。まず，1点目は，スティグマ介入の新たな選択肢を提案した点である。本研究の結果からは，教育や接触などの他の介入方法よりもACTが優れているという明確な結果は得られなかった。しかし，1) ACTを日本で初めて実践し，従来の第一選択肢であった教育と同程度の効果が示され，2) 認知的フュージョンと潜在的スティグマの関係性が示され，3) 脱フュージョンによるスティグマ介入効果があることが部分的に示唆された。この点は，スティグマに対する介入可能性を示唆するものであり，新たな介入方法の提案を行った点で意義のある研究であったと考えられる。

次に，スティグマへの介入を行う際に，潜在的・顕在的指標を用いて多面的なスティグマ評価を実施する必要性を示唆した点である。本研究では，a) 潜在的・顕在的指標と，b) 座席配置を用いて介入効果の測定を行った。その結果，明確な介入と各指標の変化の対応は明らかにならなかった。しかし，潜在的指標においてのみ，認知的フュージョンと相関がみとめられ，脱フュージョンによる介入の有効性が示唆されたこと，同じ顕在的指標であっても座席配置には脱フュージョンによる介入効果が表れる可能性があることが示唆された。以上から，複数の指標の併用により複雑性の異なる指標を使用することの必要性が再確認され，さらに，同じ顕在的指標であっても接触場面という文脈によって効果が異なる可能性が示唆された点は本研究の意義であると考えられる。

上述のような意義が示された一方で，本研究には以下の2点について限界点が挙げられた。まず，1点目は精神疾患に対するスティグマへの ACT の効果検討が不十分であることについてである。改善版パッケージの効果の有無や，大学生以外の対象者への汎用性が未検討であることが限界点として挙げられた。2点目はスティグマの評価指標の問題についてである。スティグマ指標が先行研究で用いられたものと異なることにより体験の回避とスティグマの関係性が再現されなかった可能性があること，顕在的・潜在的指標の間の関係性が明らかになっていない点が挙げられた。

以上のような限界点はあるものの，改善版脱フュージョンを含めたパッケージ介入の効果を従来の手法と比較すること，新たな尺度を作成すること，顕在的・潜在的指標について関係性も詳細検討することで，従来の介入方法とは差別化され，新たなスティグマ介入の選択肢としてプログラムが確立されることが期待される。

Oppression: A Behavioral Health Handbook. Cham: Springer.
Goffman, E. (1963). Stigma: Notes on the management of spoiled identity. New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
Link, B. G., & Phelan, J. C. (2001). Conceptualizing stigma. Annual Review of Sociology, 27, 363-385.
Masuda, A., Hayes, S. C., Fletcher, L. B., Seignourel, P. J., Bunting, K., Herbst, S. A., ...Lillis, J. (2007). Impact of acceptance and commitment therapy versus education on stigma toward people with psychological disorders. Behaviour Research and Therapy, 45, 2764-2772.